DESIGN OF A BEAM TRANSPORT LINE BETWEEN THE RFQ AND THE DTL FOR THE 1-GEV PROTON LINAC

Takao KATO

KEK, National Laboratory for High Energy Physics Oho 1-1, Tsukuba-shi, Ibaraki-ken, 305, Japan

ABSTRACT

A beam transport line between the RFQ and the drift tube linac (DTL) for the 1-GeV proton linac was designed using four computer codes, MAGIC, BTSCF, BTFIT, and LEBT. The last three codes include the effects of the space-charge. The calculated results show no increase in the transverse emittance and about a 20%-increase in the longitudinal emittance for a 20-mA bunched proton beam. Properties of the beam line are studied in connection with the effects on the final beam qualities after a long acceleration with the 1-GeV proton linac. The effects of transverse mismatch at the DTL injection, arising from the difference in the calculation method between the code BTSCF and LEBT, are discussed.

1 GeV 陽子リニアックのRFQ とDTL の間のビームラインの設計

1. はじめに

最近の高エネルギー陽子リニアックでは、ド リフトチューブリニアック(DTL)の入射器とし て、従来使われていた静電型の加速器に替わって RFO が使用される。RFO の使用により、その後の 加速過程において多くの利点が得られる。第一は、 縦方向の DTL 入射時の位相幅が小さく出来る事で ある。第二はDTL アクセプタンスの境界付近の粒子 が無い事により、リニアックの高エネルギー加速管 部分において予想されるビームロスに良い影響をも たらす事である。第三は、横方向のエミッタンス に、ある上限が与えられる事である。第四は、 DTL 入射エネルギーを高く設定出来る事により、 DTL の入射部の製作が容易になり、空間電荷効果 も減少する事である。従って、RFQとDTL を結ぶ ビームライン (MEBTと呼ぶ) は、以上述べた良好 なビームの性質をビームライン内において劣化させ ないように、且つ、その後の加速過程のおいてビー ムの性質が劣化しないように設計する事が重要とな る。大型ハドロン計画¹ (JHP) では、RFQ の出力 ビームはピーク電流 20 mA、エネルギー 3 MeV と なっているので、縦方向と横方向の双方のビームの 運動に対して、空間電荷効果が強く作用する。そこ で空間電荷効果を取り入れたコンピューターコード を開発し、ビームラインの設計を行なった。特に、 DTL 入射部の横方向のミスマッチングは、ビームエ

ミッタンスの増加をもたらす事が多いので、注意を 払うと共に、運転中にビームパラメーター測定が可 能であるビームラインにした。

2.コンピューターコード

空間電荷効果を取り入れてビームトランス ポートラインを設計するコードを開発した。バンチ を密度が一様な楕円体で近似して、その運動を扱う コード(BTSCF、BTFIT),及び多粒子間の空間電 荷効果を粒子毎に計算しながらトラッキング計算を おこなういわゆる multi-particle code(LEBT²)であ る。以上の三つのコードと、電流がomAの時の第 一近似用としてMAGIC³とを用いて設計を進めた。

Code BTSCF

Z方向に進む粒子の横方向の運動方程式は

 $\frac{1}{\beta\gamma} \frac{d}{dz} \left(\beta\gamma \frac{dx}{dz}\right) = -k^2 x \qquad (1)$ $k^2 = k_Q^2 - k_{scf}^2 - k_{rf}^2$ $k_Q^2 = \frac{q}{mc^2} \frac{cB'}{\beta\gamma}$ $k_{scf}^2 = \frac{q}{mc^2} \frac{\rho M_x}{\epsilon_0 \beta^2 \gamma^3} \qquad (2)$

$$k_{\rm rf}^2 = \frac{q}{mc^2} \frac{\pi E_0 T \cos \phi}{\lambda \beta^3 \gamma^3}$$

$$I = \frac{4\pi}{3} a_x a_y b f \rho$$

 k_{Q} は四極磁石による収束力、 k_{sef} は空間電荷効果、 k_{rf} は高周波加速電場による収束力を表しており、 β =v/c、 $\gamma = 1/\sqrt{1-\beta^2}$ 、vは粒子速度、qは電荷、m は粒子質量、B'は収束磁場勾配、 ρ は電荷密度、Mx は空間電荷の形状因子⁴、 ε_0 は誘電率、 E_0 はバン チャーの加速ギャップの平均電場、Tはtransit time factor、 φ はギャップ中心におけるrf位相、 λ =c/fは 波長、f は高周波周波数、I は電流、 a_x, a_y は横方向 ビーム半径、b はバンチ長さの半分を表している。 方程式(1)は力が一定の場合にはよく知られてい るように簡単に解けて、次式で表される。

$$\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ \mathbf{x}' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos\theta & \frac{\sin\theta}{k} \\ -k\sin\theta & \cos\theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \mathbf{x}_0 \\ \mathbf{x}'_0 \end{pmatrix} , \quad k^2 > 0 \quad (3)$$

$$\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ \mathbf{x}' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cosh \theta & \frac{\sinh \theta}{k} \\ k \sinh \theta & \cosh \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \mathbf{x}_0 \\ \mathbf{x}'_0 \end{pmatrix}, \quad k^2 < 0 \quad (4)$$

(式の中ではkは絶対値とする)

$$\begin{pmatrix} \mathbf{x} \\ \mathbf{x}' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & L \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \mathbf{x}_0 \\ \mathbf{x'}_0 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{k}^2 = 0$$
(5)

但しq=kL=k(z-z₀)、(4)式のk は絶対値を表し、添え 時の0 は初期値を表す。

縦方向に働く空間電荷力は Zs をバンチの中 心とすれば次式で表される。

$$\mathbf{E}_{scf} = \mathbf{A}(\mathbf{z} - \mathbf{z}_s) \tag{6}$$

$$A = \frac{3 I M_z}{4\pi\epsilon_0 r^2 b f}$$

ここでは、バンチ半径をrと円形に近似している。 運動方程式はpを運動量とすれば

$$\frac{\mathrm{d}p}{\mathrm{d}t} = qE_{\mathrm{scf}} \tag{7}$$

これは、横方向と同様にして解けて

$$\begin{pmatrix} \Delta \phi \\ \Delta w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cosh \theta & \frac{\sinh \theta}{K} \\ K \sinh \theta & \cosh \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \Delta \phi_0 \\ \Delta w_0 \end{pmatrix}$$
(8)

$$\mathbf{k} = \sqrt{\frac{qA}{m\gamma}}$$
, $\mathbf{K} = -\frac{k m c^2 \beta_s^2}{\omega}$, $\Delta \phi = -\frac{2\pi}{\beta_s \lambda} \Delta z$,

 $\Delta w = mv_{s}\Delta v, \Delta v = v - v_{s}, \Delta z = z - z_{s}\theta = kt, t = \Delta z/v_{s}$ 長さLのrfバンチャーは

 $\begin{pmatrix} \Delta \phi \\ \Delta w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ V & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \Delta \phi_0 \\ \Delta w_0 \end{pmatrix}$ (9)

と近似的に表される。但し、V=EoTLsinφ はバン チャー電圧である。

以上の方程式を逐次解いてビームの運動を求 める。Mac 上のTrue Basic により書かれており、必 要なグラフィックスも表示される。

Code BTFIT

横方向のビームマッチングの為に、ビームラ イン上の任意の4個の収束磁場を最適化するコード である。BTSCFを拡張したものであり、Mac 叉は HITAC 上の Fortran でも走る。

Code LEBT

i-粒子に働く空間電荷力を次式により逐次計 算しながらmulti-particle beam simulationを行なう。

$$\mathbf{E}_{i} = \frac{\mathbf{q}}{4\pi\varepsilon_{0}} \sum_{i\neq j} \frac{\mathbf{r}_{ij}}{\mathbf{r}_{ij}^{3}} \tag{10}$$

このコードはスーパーコンピューターHITAC S820/ 80 において高速化されるように、Fortran で書かれ ており、ベクトル化率 99.7% 以上が得られている。 本コードは、空間電荷効果がある時のバンチの振る 舞いの調査、BTSCF の計算結果のチェック、エ ミッタンス増加の計算を含むビームラインの評価等 に使用した。入射ビームには、RFQ のビームシミュ レーションの出力を使用した。

3. MEBTのデザインの概要

ビームラインの計算結果を Table 1 に示す。 長さは約1.64 m であり、8 個の四極磁石と、ライン のほぼ中間0.86 m に置かれた1 個のバンチャー(電 圧 115 kV)から構成される。Fig.1 にベータファン クション(β)の平方根を示す。βの最大値は約2.2 m であり、これはビーム半径 5.2 mm に相当する。図 の中の丸印は Code LEBT の計算結果である。Code BTSCF は多くの近似計算を行なっているが、大勢 では二つのコードは一致すると言える。Fig.2 にバ ンチのエネルギー幅と縦方向長さの変化を示す。空 間電荷効果の影響により、エネルギーの広がりが大 きく変化する様子がわかる。Fig.3 と4 に DTL 入射

No	Name	Length mm	Total length	Gradient T/m		Gradient (0 mA beam)
1	LD1	90	90		drift	
2	QF1	60	150	38.926	F	38.926
3	LD2	120	270		drift	
4	QD1	50	320	33.462	D	33.462
5	LD3	260	580		drift	
6	QF2	50	630	28.173	F	28.173
7	LD4	80	710		drift	
8	QD2	50	760	25.617	D	20.00
9	LD5	200	960		drift	
10	QF3	50	1010	13.33	F	13.00
11	LD6	120	1130		drift	
12	QD3	50	1180	18.99	D	21.60
13	LD7	180	1360		drift	
14	QF4	70	1430	32.51	F	32.34
15	LD8	60	1490		drift	
16	QD4	70	1560	42.88	D	37.37
17	LD9	83.5	1643.5		drift	

Table 1 Parameters of the MEBT calculated with the code BTFIT for a 20-mA bunched beam.



Fig. 1 The square-root of β -functions for the MEBT calculated with the code BTSCF. The circles indicate the results of the code LEBT calculation.

部に於ける横方向のビームマッチングの様子を示 す。Table 2 に Code LEBT により計算したエミッタ ンスの変化を示す。横方向のエミッタンス増加はみ られないのに対し、縦方向は約20%の増加が見ら れる。

3.1 バンチャーの効果

バンチャーは縦方向のビームをDTLアクセプ



Fig. 2 Variation of the energy and phase half-spreads along the beam line calculated with the code BTSCF. Wide lines correspond to a 20-mA beam, while narrow lines a 0-mA beam.

タンスへ入射させる為に必要であるが、ビームに非 線形な力が作用する場合には、ビームの性質の劣化 の原因となりうる。横方向の運動では、第一近似で は電場による発散力は線形であり、等価的な四極磁 石勾配は次式で表される。



Fig. 3 The calculated output transverse emittance (x-x') for a 20-mA beam with the code BTSCF. The acceptances of the DTL (large ellipse) are also plotted.



Fig. 4 The calculated output transverse emittance (y-y') for a 20-mA beam with the code BTSCF. The acceptances of the DTL (large ellipse) are also plotted.

Table 2 Emittance variation in the MEBT calculated with the code LE	BT.
---	-----

	$\varepsilon_{\rm X}$ (π cm · mrad)		ε _y (πcm	·mrad)	$\varepsilon_{W}(\pi MeV \cdot deg)$		
	rms	90%	rms	90%	rms	90%	
Entrance	0.0251	0.104	0.0262	0.108	0.060	0.297	
Exit	0.0253	0.102	0.0264	0.108	0.073	0.342	

$$\mathbf{B'}_{eq} = \frac{\pi \mathbf{E}_0 \mathbf{T} \cos \phi}{c \lambda \beta^2 \gamma^2}$$

この場合は前後の四極磁石の収束力により打ち消す 事が出来る。しかし、ビーム半径が大きくなると、 変形ベッセル関数で表される電場の高次の項が効い てくるので、横方向のエミッタンス増加の原因とな る。本デザインでは、バンチャー付近のビーム半径 を小さくする設計となっており、Code LEBTの計算 結果によれば無視できる大きさになっている。縦方 向の運動に関しては、電場が SIN 関数で表されるの で、バンチの広がりが大きくなると非線形な効果は 大きくなる。本設計では、バンチャーにおけるバン チの全半幅は 55度であり、90% 半幅は 32 度であ る。縦方向のエミッタンス増加は Table 2 に見られ るように 15-20% 増加しているが、逆に 100%エ ミッタンスは 17% 減少している。叉、MEBT を通 過する事によりビームのfield energy は13%減少し ており、これは、バンチ内の粒子分布が変化して一 様化が進んだ事を表している。縦方向のエミッタン ス増加が許容できるかどうかは、ビームを1GeV ま で加速してみて判断するのが適当である。そこで、 MEBTを通さずに、RFQ ビームを直接DTL に入射

Table 3 Comparison of the output emittances (90%) for a 20mA beam at an energy of 1 GeV between the simulations with the direct-injection and with the LEBT-injection. The

energy spreads (90% full) are also listed.

	εχ	εγ	ε _W	Δw
	π cm · mrad	$\pi \text{cm} \cdot \text{mrad}$	πMeV·d	egMeV
Direct-injection	0.124	0.111	3.72	1.44
LEBT-injection	0.119	0.115	4.92	1.56

させる方式 (Direct-injection) と比較してみる。ど ちらの場合も横方向のマッチングをほぼ正確に行 なっており、電流 20 mAの空間電荷効果を入れてい る。DTL計算は Code PARMILA、 150 - 1000 MeV (CCL)の計算は Code PROEND⁶ により行なっ た。結果をTable 3 に示す。LEBT-injection 方式で は、90%縦エミッタンスは 30 %、100% 縦エミッ タンスは7%大きくなっている。横方向エミッタン スとエネルギー幅には、大きな差は見られない。 Fig. 5,6に1 GeV の縦方向出力エミッタンスを示す。 これらの結果から判断すれば、MEBT における rms 及び90 % 縦エミッタンスの増加は、その後の加速 過程においては、無視出来る量と思われる。 3.2 DTL への入射とマッチング

	$\varepsilon_{\rm X}$ (π cm · mrad)		$\varepsilon_{\rm y}$ ($\pi \rm cm \cdot \rm mrad$)		$\varepsilon_W (\pi MeV \cdot deg)$	
	rms	90%	rms	90%	rms	90%
Matched	0.0262	0.109	0.0278	0.115	0.159	0.704
Mismatched	0.0287	0.117	0.0272	0.115	0.161	0.714

 Table 4 Comparison of the output emittances at the DTL exit between the matched-injection and the slightly mismatched-injection into the DTL.



Fig. 5 The calculated output longitudinal emittance for a 20-mA beam after accelerations by the DTL and the CCL. The output beam from the RFQ was directly injected into the DTL without any beam lines.

BTSCF はLEBT に比べて、数多くの近似計 算を行なっている。一様分布するビームを仮定し て、空間電荷効果も円形な対称ビームの計算結果を 使っている。この場合、横方向のビームの非対称性 が大きいと誤差が大きくなる。rfギャップの計算法 においても、非線形な効果は入っていない等の近似 をしている。反面、Code LEBT はバンチを数千から 数万の粒子で近似する事を除けば、より優れた計算 法を採用している。従って、BTSCF の計算に使用 したパラメーターをLEBT に入れて計算すると、結 果が僅かに違ってくる。即ち、DTL 入射において僅 かながらミスマッチを生じてしまうのである。 (空 間電荷効果がなく、一様な粒子分布を仮定すれば、 両者の結果は殆ど一致する事は確認している。)そ こで、Code LEBT が計算したビームをそのまま DTL に入射させる場合と、入射前に DTLの横アク セプタンスに正確にマッチさせてから入射させる場 合とを比較してみる。結果をTable4に示す。僅かの エミッタンスの形の差により、x方向では10%近 くのエミッタンス増加が DTL内で生じる事がわか る。これに反して、y方向ではエミッタンス増加は



Fig. 6 The calculated output longitudinal emittance for a 20-mA beam after accelerations by the DTL and the CCL. The output beam from the RFQ was injected into the DTL after traversing the MEBT calculated with the code LEBT.

起こっていない。この増加の非対称性の原因の一つ は、空間電荷効果がある場合のDTL アクセプタン スの求め方にあるのではないかと考えている。問題 は、こうした少しのマッチングのずれにより、エ ミッタンス増加が起こる事にあり、計算上ではこの 点に注意が必要であり、現実のビーム加速に適用す る場合には、補正のチューニングが必要となる事を 意味している。

参考文献

1. M. Kihara, Proc. Advanced Hadron Facility Accelerator Design Workshop, Los Alamos, p.4 (1988). Y. Yamazaki et al., p.80 (1988).

2. T. Kato, KEK Report 91-10 (1991).

3. A. S. King, M. J. Lee, and W. W. Lee, SLAC-183, RL-75-110, EPIC/MC/86, UC-28 (1975).

4. R. L. Gluckstern, "Space-Charge Effects," in Linear Accelerators, p.827.

5. T. P. Wangler et al., Nucl. Sci. **32**, 2196 (1985), I. Hofmann and J. Struckmeier, Particle Accelerators **21**, 69 (1987).

6. KEK-Internal 88-8 p.137, KEK Internal 90-16 p.211.